

令和6年度 研究計画の概要

白井市立白井第一小学校

1 研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導の在り方

～「思考の視覚化」「振り返り」の充実を通して～

2 主題設定の理由

(1) 学習指導要領から

(ア) 学習指導要領の総則から

第1節 小学校教育の基本と教育課程の役割

2 学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、第3の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、次に掲げる事項の実現を図り、児童に生きる力を育むことを目指すものとする。とある。

(1) 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実をめぐる。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮すること。

上記の実現を図り、算数科の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すかを明確にしなが、教育活動の充実を図るものとする。その際、児童の発達の段階や特性を踏まえつつ、知識及び技能を習得したうえで、思考力、判断力、表現力等を育成し、学びに向かう力、人間性を涵養することが偏りなく実現できるようにしていけるような指導が必要と考える。

第3節 教育課程の実施と学習評価

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善において、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の具体的な内容については、以下の三つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。

- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

子ども自身が興味をもって積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付けた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

また、身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子どもや、子ども同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

さらに、子どもたちが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。教員はこの中で、教える場面と、子どもたちに思考・判断・表現させる場면을効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められている。

(イ) 算数科の目標から

数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次の通り育成することを目指す。

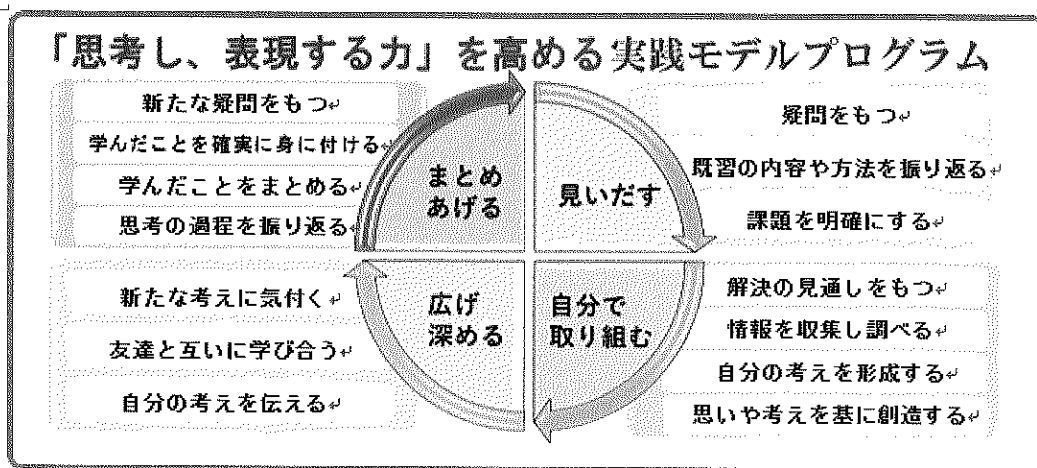
- (1) 数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるようにする。
- (2) 日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見いだし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。
- (3) 数学的活動の楽しさや数学のよさに気づき、学習を振り返ってよりよく問題解決をしようとする態度、算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。

新学習指導要領の目標で、幼児期に育まれた数量・図形への関心・感覚等の基礎の上に、小・中・高等学校教育を通じて育成を目指す資質・能力を、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿って明確化し、各学校段階を通じて、実社会との関わりを意識した数学的活動の充実等を図っていくことが求められている。

(2) 千葉県の小学校教育過程の展開から

『「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム』の活用

『「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム』（以下 実践モデルプログラム）は、「物事を筋道立てて考える思考力」「自分の考えを書いたり、発表したりする表現力」の育成を目指すための授業づくりを支援するものとして作成された。令和元年度には、「主体的・対話的で深い学び」の視点に加え、新しい実践プログラムとして改訂された。



授業を実践する前に、資質・能力を身に付けた児童の具体的な姿を描き、本時（本単元）の目標を明確にもち、必要となる学びについて考え、実践プログラムから児童の学習活動例を選び出し、「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」を意図的・計画的に位置付けていく。

本校の算数科研究においても実践モデルプログラムを授業展開に取り入れ、児童の思考力や表現力の向上を目指していく。

(3) 白井市学校教育「なしビジョン」から

- 1 持続可能な社会の創り手
- 2 確かな学力
 - (1) 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり
 - (2) 全校体制での特別支援教育
 - (3) ICTの常時活用・有効活用
- 3 豊かな心
 - (4) 「やる気」を育てる生徒指導の推進
 - (5) 豊かな人間関係を育む学級づくり
- 4 健やかな体
 - (6) 「体力」「活力」を高める体育指導の創造
 - (7) 自他の命を大切にする健康・安全教育の推進



白井市学校教育「なしビジョン」がコンセプトとして掲げている「持続可能な社会の創り手」とは、学習指導要領総則の改訂の経緯において、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されるとある。子どもたちが予測困難な時代を生きていくためには、小学校において確かな学力を育てていかなければならない。「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりを通して、それを実現していくことが必要である。

(3) 学校教育目標と本校の児童の実態から

1 学校教育目標

心豊かで 共に学び合う たくましい子どもの育成
 ～「自分でGO！ 自分がGO！ そして共にGO！」を合言葉に～

- 〈めざす児童像〉
- 自らを伸ばそうとする子
 - よく考えともに学ぶ子
 - やさしく思いやりのある子
 - 健康でたくましい子

- 〈めざす学校像〉
- 明るく楽しい学校
 - 安全できれいな学校
 - 地域とともに歩む学校

- 〈めざす教師像〉
- 質の高い授業を追求する教師
 - 子どもの良さをほめる教師
 - 組織で対応する教師

2 経営方針

本校の歴史と伝統を大切に、児童・保護者・地域から信頼される教育活動の展開

3 本年度の経営の重点

- ① 学習指導の改善
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現
 - 協働的な学びの推進
 - ICT 活用の推進
 - 授業の振り返りによる自らの学びの見取り
 - 読書活動の推進
 - 家庭学習の習慣化
 - 特別支援教育の充実

本校では、学習指導要領や千葉県の教育課程の展開、白井市学校教育なしビジョン」を受けて左記のように学習指導の改善を学校教育目標に掲げている。

全国学力学習状況調査の結果から、本校の児童は読んで理解する力と表現する力に大きな課題があることが分かる。そんな児童の実態を鑑みると、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すにあたり、思考の視覚化による

に焦点をあてた話し合い活動や学び合い活動、振り返りを通じた教育活動の工夫を研究していく必要がある。

以上(1)～(4)踏まえて、研究主題を設定した。

2 研究仮説と内容

【仮説1】

比較検討の場において、児童の思考を視覚化し、焦点を絞った話し合い活動等の工夫を行えば、児童一人一人が主体的に学び、学びを深めることができるだろう。

- (1) 思考を視覚化することによる話し合いの焦点化の工夫
 - ・比較検討の開始時に、全体で「考え方」を共有する。
 - ・話し合いの場を選択させる。(マグネットプレートなどの活用)
- (2) 思考したり、表現したりするためのツールの工夫
 - ・ミライシードなどのアプリや思考ツールなどを活用し、視覚化や整理等をする。

【仮説2】

自己の学びを見取った振り返りをすれば、次時の活動目的が明確化し、児童一人一人が主体的に学び、学びを深めることができるだろう。

- (1) ICTを活用した「振り返り」の共有
 - ・SKYMENUなどを利用して、学級全体で共有できる環境を整える。
- (2) 「今日しか書けない」を意識した振り返りの記入
 - ・「～さんの〇〇な考え方がわかりやすかった」「△△のやり方がわからなかった」などそのタイミングでしか書けないこと記入する。
 - ・共有した「振り返り」を見合い、自分の学びをメタ認知する。
 - ・共有した「振り返り」を見合い、次時の学習の目標を設定したり、自己の活動の見通しを立てたりする。

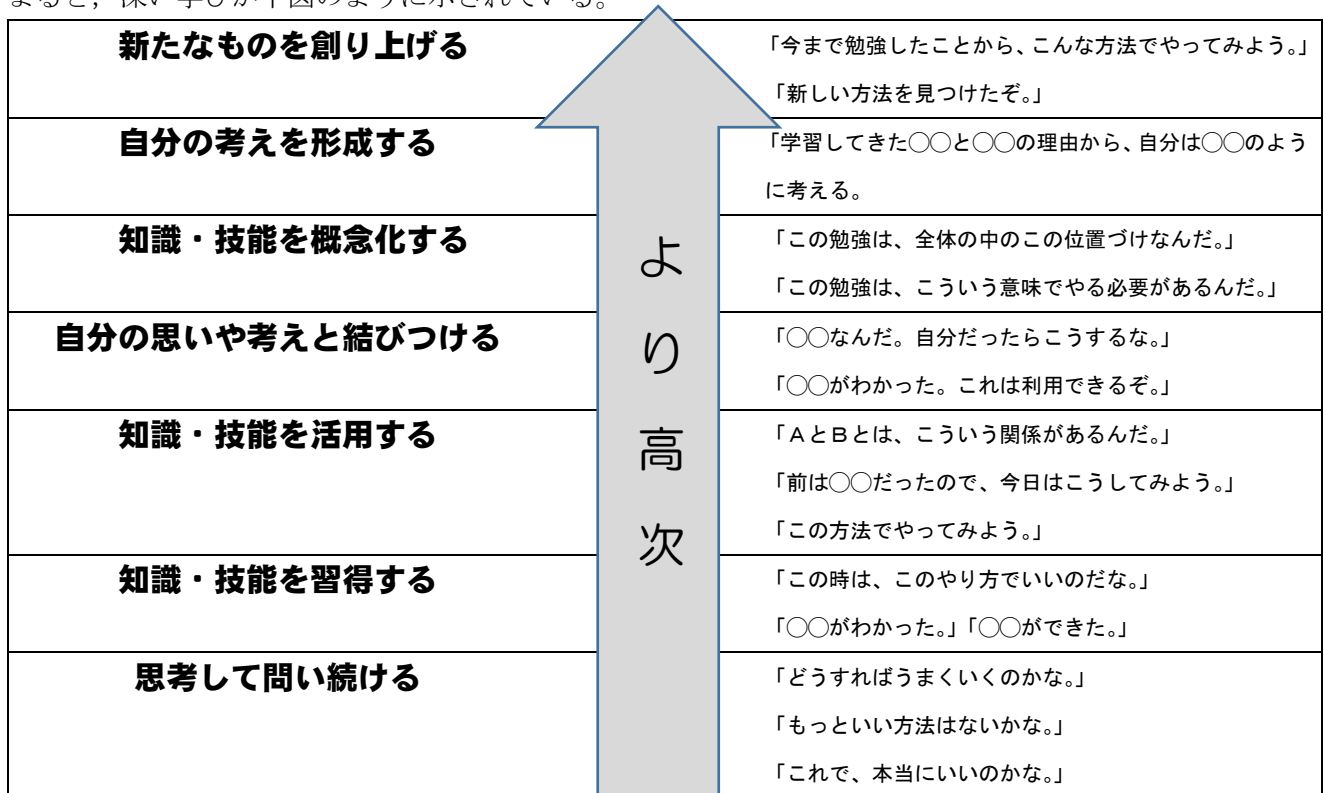
研究教科は、昨年度と同様に「算数」です。今年度は3年目に入りました。昨年度まで取り組んできたことを踏襲しつつ、新たな取り組みを実施して、主体的な学びや深い学びへつなげられるようにしたいと考えています。これまで通り、「教えて！」を言える環境づくりや比較検討の場の工夫、自分で書く「まとめ」づくりなどは継続していきます。学び合いの活動の場で、一人学びをしている児童を生み出さないようにしていくことが必要です。

今年度の重点取り組みは2点です。この2点は研究主題の副題に新たに記載したものです。まず、「思考の視覚化」です。算数科の研究を行ってきたこれまでの2年間で、「教えて！」を言える環境づくりや話し合い・比較検討の活動は、子どもたちの中にも根付いてきた学び方です。今年度はそれに加え、児童の考えを視覚化し、共有することで、比較検討する対象を児童が把握し、自身に有効的な場を選択できるようにしたいと考えます。視覚化の方法には、板書やICT活用が挙げられます。単元や学習活動に即した方法を計画していきましょう。次に、「振り返り」です。算数科を中心に毎時間の振り返りを行います。毎時間の学習の単なる振り返りだけでなく、児童同士で見合ったり共有したりすることで自分がどの程度できているかをメタ認知できます。さらに、考えを見合えることで多様な考え方に気付いたり、意見交換のきっかけになったり、次時の学習活動の見通しをもったりできます。主体的な学びを促進したり、学びの深め合いにもつながったりできると考えます。

3 「深い学び」の本校の捉え方

教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官 笠井健一氏によると、深い学びとは、「本質を見極めたり、よりよい方法を選べたりすることだけでなく、日々学んでいく中で少しでも、『あ、そうか』『こういうことなのか』と分かることが深い学び」という趣旨の発言をしている。また、ある授業研究会の協議会において、「0が1になる、1が2になる、AとBの2つの方法からよりよいものを選択できるようになるなど、一人一人に深い学びがある。」とも発言している。

また、栃木県総合教育センター発行の『主体的・対話的で深い学び』に関する調査研究（H30.3）によると、深い学びが下図のように示されている。



本校では深い学びについて、ある一定の基準を越えなければならないものではなく、児童の実態に応じてそれぞれに深い学びがあると捉えることとする。児童一人一人が授業の始まりと終わりの自らの思考・判断・表現や知識及び技能を比較したとき、どのような変容があったかを捉えることが重要である。指導者は児童一人一人の1単位時間や単元における変容を見とり、学びの深まりを評価していくことが求められる。

4 研究組織

